

【ASEAN 対象】 □H23 (A-Ⅱ) ■H24 (Ⅰ) □H24 (Ⅱ) 【AIMS】 □H25／慶應義塾大学

■プログラム名

アジアの新出課題解決に向けたエビデンスベースドアプローチ大学コンソーシアム

――以下、マレーシア・インドネシア・フィリピンに特化した内容を主に記載ください。――

■相手大学・機関（国名も記載ください）

マラヤ大学（マレーシア）、マレーシア科学大学（マレーシア）、バンドン工科大学（インドネシア）、ガジャマダ大学（インドネシア）、ブラビジャヤ大学（インドネシア）、フィリピン大学ディリマン校（フィリピン）

■主な活動内容（概要）

本プログラムでは、マレーシア・インドネシア・フィリピンの大学を含む、日・ASEAN 大学のコンソーシアムを形成し、共同教育プログラムである EBA コースを開発している。具体的には、フィールドワーク・インターンシップ、授業科目（共通科目、専門科目、実践科目）、オープンセミナーを提供・実施し、ASEAN 共通課題である「健康・公衆衛生」「環境・エネルギー」「防災・セキュリティ」の分野における専門的なグローバル人材を育成する。

■プログラムの現状・課題、成功事例

（単位互換、危機管理、寮・奨学金、その他プログラムをつくる上での障害等について、できるだけ具体的に記載ください）

現状・課題

平成 26 年度より、実践科目として「日本語」授業の提供を開始した。まず、6 月～7 月の 7 週間で、主に今夏フィールドワークに参加する学生を対象とした「サバイバル・ジャパニーズ」の授業を実施。フィールドワーク参加中に直面すると思われる様々な場面での役立つ表現・語彙を教えた。受講者は、テレビ会議システム Polycom か WEB 会議システム v-cube を使用して慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（以下「SFC と略」）に接続し、SFC から発信される授業にインタラクティブに参加。この方法により、現在、海外にいる学習者に日本語の授業を提供できるというメリットがある反面、画像が鮮明に映らない、マイクトラブルが起こるなど、数分ではあるがシステムの障害が原因で授業が中断してしまうというデメリットがあった。また、個人参加者（v-cube 参加者）の中には Audience Mode（学習者からの発話ができないモード）で参加している人がおり、それらの学習者については、教師が指名して発話させることができないという問題もあった。これらの問題を改善するためには、システムの機能を高めるべきなのか、それとも各授業の実施内容に工夫を加えるべきなのか、検討することが課題である。

成功事例

今回の受講者の日本語レベルは、入門（ゼロ初級）～初級である。「サバイバル・ジャパニーズ」と謳っていることもあり、教授項目は「学習者が日本で遭遇する場面」で使われる日本語表現に限っているが、授業中に日本語学習歴のある学習者がふと発した言葉がきっかけとなって、それを学習者全体に教授できることが比較的多い。従って、事前計画よりも幅広い日本語表現を学ぶ機会が提供できている。また、時々、授業で扱うトピックに沿った文化紹介をしてもらうことがあるが、学習者が自国で受講していることから、身近にある様々な現物を持ってきては披露してくれる。これは、写真や絵で互いの文化を紹介してもらうよりずっと効果的で、他の学習者の関心を惹きつけるきっかけになっているばかりか、その後の学習者全体の発話が活発になるのに一役かっている。